

アー・ヤー・ボヤルスキー編（市原亮平監訳）
『人口学読本，批判的人口学の教程(上)』
三和書房，1976年，4 + 8 + 278ページ

本書は，ボヤルスキーほか7名の著者による Курс Демографии (Text Demography. 1967) の訳である。原書は大学生を対象とした7編24章で構成されている人口学の教科書である（本書の目次）。本書はそのうち4編13章がおさめられている。なお，下巻の出版予定は現在のところないとのことである。

書評の対象としては全部そろったところでおこなうべきであるとの考えもあるが，次の理由から上巻を対象としておこなうことにした。第1に，人口動態現象を混乱させる要素を，指数測定の際に除却できるように，「人口の再生産指数（第4章）」計算の分母を「平均人口」と定義したこと，第2に欧米における最近の“形式人口学”的成果が上巻に含まれている（12章と13章）ことの2点である。

第1編では「マルクス・レーニン主義的人口理論」，「人口研究の実際の意義」および「人口法則の歴史性」が扱われ，人口研究の中心テーマが人口再生産であり（1ページ），「計画経済」のために人口予測が重要であることが強調されている（12ページ）。第2編では人口静態統計，第3編では人口動態統計が扱われ，後者には標本調査や人口関係の刊行物のガイドが付いている。

第4編は，人口研究の中心である人口再生産の計測論で，動態発生之母集団と動態率を定義し，それに基づく「死亡率表」，「結婚と離婚」，「出生力」の各計測方法が扱われている。

動態発生之母集団を「平均人口」，より正確には人年齢（163, 166ページ）〔Barcklay 1958 では person-year lived — 評者注〕とし，年央人口や国勢調査人口などはあくまでもその近似値としている。

それは，ソ連における地域移動が大規模であったため，地域の人口動態現象を正確に計測するには「平均人口」の概念が必要であったためと思われる。その結果，人口動態現象の分析をより統一的な方法でおこなえるようになった。それが，「死亡原因別死亡率表」，「結婚率表」であり，「婚姻出生力（251-259ページ）」へと変わってあらわれてきている。

すなわち，1870年前後の生命表理論の完成が，死亡とその母集団である生存人口を正確に関係づけた幾何学的理論の発展によった〔足利末男 1966, 『社会統計学史』, 372~411ページ〕ように，出生や配偶関係上の移動の分析にも「平均人口」の概念が用いられているからである。

そうした意味で，これまでの“形式人口学”の代表的教科書であった館稔の『形式人口学』（1960）以降の成果をふまえた，大変すぐれた教科書であるといえる。しかし，一読したとき違和感を持った理由は，まず館の用語体系とかなりちがっていること，つぎに本書の内での用語のわずかな混乱がみられるからである。

前者の例は，総死亡率（168ページ）〔普通死亡率ないし粗死亡率〕，生存者総数〔人口集団〕と死亡者総数（191-3ページ，ときに和）〔死亡集団〕などで，後者の例は， l_x と L_x の両方に生存者数という用語を同じ178ページで用いている。

研究の新しい展開には新しい概念が必要であるが，既存の概念・用語体系との関係を明らかにしておけば，その新しい展開が容易に理解されよう。そのため，訳注や原書にある索引（序文）をつけられることが，本書の教科書としての価値をより高めることにならう。

（伊藤 達也）